

倉敷通信

これが倉敷天文臺よりの第一報である。倉敷へは、待ちに待った三十二センチの大反射鏡が去る十月九日に到着し、翌十日には山本博士等立ち合ひの下に、さりあへず、農業研究所の中の講義室内に組み立てられた。ついで、十月下旬からは天文臺設立豫定の敷地の手入れと、観測室の設計が始められ、十一月上旬には、既に気持ちの好い観測室の大凡その形が出来上つた。そこで十一月十四日には、いよいよ、反射鏡のわしである中村要氏が京都から倉敷に乗り込み、原氏の御宅の客さなつたまゝ、爾後毎日観測室に出かけて据え付けに取りかゝつた。かなり永い間、使用されずにあつた器械であるから、部分品のクリーニングに中

村氏は意外の時日を費されたが、十八日になつて、遂に望遠鏡全體の据へ付けが終つた。

十一月二十日には京都から山本博士と竹田理學士が倉敷へ着いた。そして、創立式を愈々「明日」にひかへた其の日の夜から、天文臺の経緯度の観測が始められた。器械はわざわざ京都大學から運ばれた天文経緯儀と時辰儀とであつて、尚ほ、東京から無線報時を受けるために、三つの真空球を持つたラヂオ機が持参された。

二十一日の創立式の日、朝早くから天文臺附近に人々がざわつた。準備に忙しい臺員たちの外に、大工、電燈工夫ペンキ屋などが未だ働いて居た。其のほ

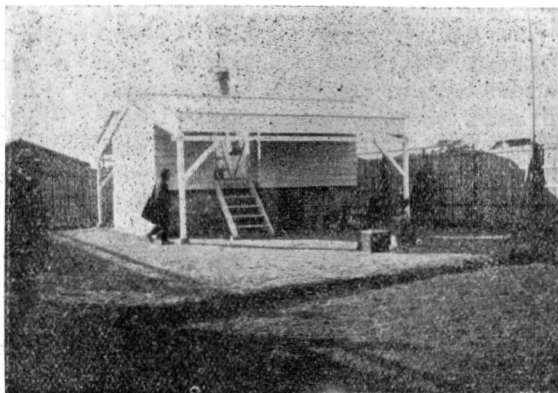
か、新聞記者、近所の人々などが入り交り、立ち交り、やつて来た。いよいよ豫定の午後三時には、岡山市其の他の土地から、縣知事代理や高等學校長其の他の知名の士が式場に着席し、約二百の來會者が總ての席を埋めた。

式は水野主事の司會で始められ、其のプログラムは

- 1 開會辭 水野 千里氏
- 2 倉敷天文臺設立の由來 主事 水野 千里氏
- 3 式 辭 名譽臺長 原 澄 治氏
- 4 祝 辭 岡山縣知事代理、學務課長
- 5 紀念講演「天體と望遠鏡」 臺長 山本 一清氏
- 6 閉會辭 水野 千里氏

であつた。式は午後五時半に終り、來會者一同は紀念品として「簡易星圖」を一枚づつ配布せられた。

式が終つて後、氣の早い人々は直ちに観測



落成した倉敷天文臺の假觀測室

室に馳け込んで木星などを見始めたが、多數の人々は夕食のため一旦引き上げた。中に、特別招待の約三十人だけは別室に於いて折詰の夕餐が饗せられ、原氏の挨拶があつた。

午後七時を待ちきれないで、再び多數の人々は寄せて来た。新天文臺の中では32センチ大望遠鏡を 中村 要氏が、8センチの屈折鏡を 宮原 節氏が、今一臺の8センチを 水野千里氏が、又、7センチ屈折鏡を 奥田 毅氏が擔當して、人々に、火星、木星、月等を見せた。午後六時半から、殆んど十時過ぎまで、前後四時間にもわたる間、人々は交代して天體を見た。總計幾人の人が來觀したか？ それは誰も知らない。或

る人は、それが「三百人ぐらゐ」と言ふ。又或る人は「少なくとも三百五十人を降るまい」と言ふ、又別の人は「殆んど四百人に達しただらう」と見積つた。いづれにしても、此の、人口二萬に足りない小さい町に、これだけの人が天體を見て樂んだといふことは、空前のことであつた。——天氣も良かつた。特に此の日は晝の間から空に一片の雲も浮ばない好天氣で、おまけに、晝の微風が夜には全く無風となつた。あらゆる點に於いて倉敷天文臺の活躍の第一日は成功であつた。

此の公開の日、山本、竹田兩氏は、群衆のざわつきに惱まされながら、經緯度の觀測を勵んだ。

翌二十二日は空模様が悪かつた。山本博士は午後岡山の第六高等學校へ講演に行かれたが、六時、倉敷の原氏宅へ歸られた時には、既に雨が降つてゐた。それで中村氏等も、どうすることも出来ず脾肉を抱いて、室内に雑談したり、讀書したりした。しかし、竹田氏だけは午後九時の無線報時を聞くため、天文臺へ行かれた。

二十三日は晴れ模様となつた。中村氏は午前中から、天文臺に出かけて、大望遠鏡の自動裝置の据付けをやつてゐられた。山本、竹田兩氏は此の日、日没後、又、石の臺の上に經緯儀を持ち出して、經度・緯度の觀測をやられた。しかし此の夜十時四十分の汽車で、兩氏は京都へ歸られる筈であつたため、觀測は十時ちょうどで切り上げられた。

中村氏は一日遅れて、二十四日の夕刻に京都へ歸られた。



支 部 通 信

岡山支部通信

◎八月十九日水野幹事は臺北測候所を

訪ひ、四時望遠鏡で太陽の黒點を觀測し子午儀を參觀された。

◎八月二十一日基隆出帆の吉野丸で、水野幹事父子は歸途に就き、二十三日門司に上陸、二十四、五日は北九州を一瞥し、二十六日は山口縣徳山町に開會中の、地理講習會場に山本博士、中村要兩氏を訪ひ、倉敷天文臺について諸種の打合せをなし、夜分科外講演として「天文旅行談」を試み二十七日歸岡された。

◎九月四日は岡山市立商業學校、六日は關西中學校、十一日は再び岡山市立商業學校、十九日は支部例會、二十六日は地理談話會で、水野幹事は「天文旅行談」をした。

◎九月十一日宮原幹事宅で「天界研究會」

◎九月十三日玉井市商教諭宅、十八日支部、二十二日村井前市商校長宅、二十八日服部奎三郎氏宅、二十九日市營住宅で、天體觀測會が催され、何れも水野幹事が指導した。(水野千里)

下關支部報告

◎八月二十九日山本博士天文講演會

山本博士中村要氏の御二人が徳山町山口縣教育會主催の講習會に御西下の好機を捉え講演觀測會を開催、暑中に拘らず素晴らしい盛會を見ました、會の經過下の通りです。

八月二十九日夕下關商業會議所ホールで關門日々新聞社後援にて開催集る者男女約600名餘何れも知識慾に燃ゆる熱心家で開會前既に滿員の盛況で然も尙來場者絶へず隣室を使用する等の混雜を呈しました。山本、中村兩先生は5時40分下關驛着、錄々休憩の暇もなく、7時に臨場廣津支部長の紹介で登壇『星の光は人間が使つてゐる光よりもズツト小さいものであります、だがその輝きには何さなく人間を引つける魅力を持つてゐます……』と詩人の如く美しい詞で語り初め人間と天文學との關係、天文學の歴史を淳々々述べて哲學者の知悉態度で宇宙觀を説き科學者としての辛辣な言句で迷信的天文學を斥け、更に敬虔な語調で『我々は永久の旅行者である地球と云ふ大きい乗合船に乗つて宇宙の果から果へ渡り行く旅行者である』と聽衆を宗教的感傷に誘

つて恍惚たらしめ約二時間に亙る長講中暑さを感じず靜かに説き進めて神祕の扉を開き聴衆の魂を浩然驚異の世界に浸らしめ途中一人の退場者もなく聴衆を法悦境において降壇、次で中村要氏火星について一時間専門的に説きあかして火星に對する迷信的蒙をひらいて閉會、會後露臺で3吋望遠鏡3臺で木星の衛星を一般に觀測させ11時散會、關門日々新聞は翌日夕刊三面初頭に三段抜の記事と講演及觀測の寫眞を掲載、尙翌日より山本博士の講演要旨を連載する事當地としては嘗つて科學講演に於て是程のセンセーションを起したことは最初であります。尙今月末會員足立氏の自作8吋反射鏡を中心として天體觀測會を催す豫定です。

高松支部報告

本年の火星接近につきまして高松支部でも十月二十七日に觀測の筈でしたが丁度曇天で不可能でした故二十九日夜いたしました。

そして約五十名の觀測者があり同夜は支部内で天體寫眞なんか見せ大分にぎやかでありました。

さて其當時小生香川新報に火星の話と題して二日間いたしました甚つまらない事柄を書いたのですが新聞を見て又觀測に參つた者もありました。(田中朝夫)

紀伊支部報告

火星接近を機會に左の如く續け様に五回の觀測會を開き同好會の宣傳をやりました。

第一回 十月二十三日 (鳥屋城校庭)

主として火星木星の觀望 來會者十數名

第二回 十月三十日 (同右)

同右 來會者五名

第三回 十一月一日 (同右)

同右 來會者五名

第四回 十一月十三日 (自宅)

曇天、わづかに火星を見る 來會者四名

第五回 一月二十日 (同右)

火星、木星、月、二重星 來會者六名

望遠鏡は口径五十センチのものなれど一〇〇倍にて火星の大シチルスを見得、來會者に大満足を與へました。

この結果新會員數名を得、更に相互に

大宣傳を約し大發展の見込を得ました事を喜んで下さい。猶此等新會員は何れも非常に熱心です。(十一月二十三日小橋孝二郎)

南滿支部通信

滿洲の冬の空もいよいよ壯麗です。西岡先生が奉天に移られたので不肖私が大連支部幹事の榮職を擔つてこれから分相應の活動を期してゐます、何卒御指導を御願申上げます。

大連驛頭の夢物語が實現してツアイスの21X, 47X, 94Xを學校と保護者まで買つて貰ふ事が出来まして、同じ校内で同じ志の友小林、酒井、白木の三名と共に活躍してゐます。

滿洲夏期大學での御講演に刺戟されて天文の同好者が増し滿洲の空に親しむ者の多くなつた事は何と云ふ仕合せでせう誠に御同慶に存じます厚く御禮申上げます。西岡幹事の奮闘がひのあつた事が素地をつくり先生の御講演がいよいよ機縁を與へて下さつたのです。

曩に滿鐵社内に女子の會員が出来今度私の學校からも一人の女子の會員が出来ました其の方々の爲に私が明土曜日の午後四時から私の力及ぶ事は私で其の上は西岡先生に御願ひして通俗的に趣味的に第一歩を築き積ります、先生の著書先生方の新聞雜誌に記されたものに私の多年の空を眺めた感じを添へて大連の女先生方も参加してくれます。

私の學校の子供が夏あの講堂であの幻燈で先生の趣味津津たる御話があつてから天上の友達に親しむ事は格別で夜の集りを待遠しく喜んで集つてくれます。

大來と申す六年生四名には望遠鏡を扱はせてゐます。

新會員七名必ず將來に多く同好者を誘つてくれる程の熱心の方ばかりださ嬉しく御報告申上げます。(11月12日 石川龜治)

○ヘルツスブルグ教授の渡

米 オランダ國ライデン大學天文臺の副臺長 E. Hertzsprung(ヘルツスブルグ)教授は1926年の秋から來國に渡り、ハーグで學院天文臺で變光星の研究のため暫く滞在することにした。